校友時報

昭和61年10月９日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塙２番１号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

新生徒会スタート！

会長に西塚哲君（二G）

去る９月11日、昭和61年度生徒会長、同副会長の生徒会役員選挙が行われた。また、同時に応援団正副団長の信任投票も行われ、団長不信任・再公示という波乱もあったが、９月19日の生徒会役員の決戦投票と同時の補欠選挙で、無事決着を見た。

応援団長 補選で金子豊君（二G）に

このたび任期満了にともなう生徒会役員選挙が行われ、会長に西塚哲君（二G）、副会長に渡辺秀生君（一B）が選出された。また、応援団正副団長には信任投票の結果団長に金子豊君（二G）、副団長には佐々木正樹君（二D）がそれぞれ選ばれた。去る八月二十五日に公示されてから九月十九日の決戦投票、補欠選挙まで約一カ月間にも及ぶ選挙戦が行われた。

今年も正副会長には、立候補者が一名も出なかったため、二年生からは会長候補、一年生からは副会長候補を各クラス一名ずつ推薦して九月十一日（木）に立会演説会が開かれた。投票はその後、各クラスの教室で行われたが、最高得票数が過半数に満たなかったため上位二名による決戦投票となり、約一週間後の十九日（金）の決戦投票で、会長、副会長が決定した。結果は次の通りである。

右　西塚　哲君
左　渡辺秀生君

生徒会長
当選　西塚　哲（二G）四八五
次点　村上主税（二F）四五九
無効・白票　七〇

同副会長
当選　渡辺秀生（一B）四九一
次点　石上　慎（一E）四二〇
無効・白票　五〇

また応援団正副団長は、十一日の投票の結果団長が不信任となったため、十八日補欠選挙の立会演説会が開かれ翌日投票が行われた。結果は次の通りである。

応援団長　金子　豊（二G）
信任　八六六
不信任　九八
無効・白票　五〇
同副団長　佐々木　正樹（二D）
信任　七一六
不信任　二四五
無効・白票　四一

新応援団長は「みんなに好かれる応援団をめざす」と意欲を燃やしている。

今回の役員選挙では新しい試みとして候補者が自筆で書いた自己アピールが選挙号外として出され好評を博した。その反動なのか、立会演説会がお願いのあいさつや、自己紹介だけのものが目立ち、自分の抱負が十分に述べられず内容が薄く、終始なごやかな雰囲気に進んだものの全体としては今一つもの足りなさを残した。

毎年のことながら、選挙運動がなかったことは、候補者の無気力だけでなく、学校全体がそういう雰囲気ではなかったことも原因の一つである。「生徒会への無関心さ」は今に始まったことではないが、生徒会の重大さというものをそろそろ考える時だろう。新生徒会長も「みんなが楽しく、学校生活を送れるような生徒会にしたい。生徒、一人一人の協力が必要だ。」と語ってくれた。西塚執行部の今後の活動に期待したい。

部説

二百号発行にあたって

本校の学校新聞「校友時報」が、今号で第二百号を迎えた。二百号——ひと口で言ってもピンとこないかもしれないが、昭和二十三年六月の第一号発行以来、実に三十八年間、手前味噌ながら我が新聞部、そして学校全体の活動の足跡を記録し続けてきた事を物語る意味で、偉大な数字であると言えよう。

ここに栄えある二百号を発行するにあたって、まず最初に、力を尽くして我が部を育てあげて下さった各期の諸先輩、そして誠心誠意御指導下さった代々の顧問の先生方に、改めて敬意を表したい。

三十八年間の歴史の裏にはいつも、それぞれの代の諸先輩の必死の努力や苦労があったはずである。活動方針について先生と激しく議論を戦わせた先輩、たった一人で新聞を作り上げた先輩もいたという。部員数の不足や予算の問題など、様々な困難を乗り越え、今、我々の代でめでたく二百号を迎えることが出来ると思うと、諸先輩には心から頭の下がる思いである。

また、二百号を迎えたとはいえ、まだまだ改善すべき点はある。例えば、以前に比べて紙面にシャープさが少ないと言われる。部員同士で、「ここはこうだ」「いや、それではだめだ」と、互いの意見をぶつけ合うことが、ほとんどなくなってしまったのだ。それには、年々進学率が高まり、部員もそれぞれ多忙で、部のみには集中出来なくなった事も反映しているのだが、安易な妥協精神が強まってきたものと思われる。この点は、是非改めねばなるまい。

学校新聞の本来あるべき姿とは、学校側と生徒、そしてもちろん生徒間相互の、情報交換とコミュニケーションの場である。現在「校友時報」は、その役割を果たしていないとは言えないまでも、まだまだ活動範囲を拡大する余地は残されている。二百号という現在を起点に、これからはより意欲的な活動を展開していきたい。これまでの歴史をふまえて、「校友時報」の名に恥じない紙面作りをしていくことも、あとに続く私達の使命である。常に生徒の意見を反映し、臨機応変の柔軟な対応が出来る紙面でありたいものだ。これから「校友時報」が、幾十もの号を重ね、さらによりよく〝能代高校〟を伝えていくためにも、生徒のみなさんの率直な意見をお願いしたい。

（清水）

二百号紙面紹介

1面—生徒会役員選挙・進学懇談会
2面｝二百号特集(1)　新聞部OB座談会〝校友時報の歴史〟
3面｝
4面—二百号特集(2)　能高新聞部のあゆみ
5面—軟式野球全国大会特集
6面—四〇キロ強歩

—卒業生との進路懇談会—

勉強法をアドバイス

去る八月二十日（水）、視聴覚室において、主に三年生を対象として、卒業生との進学懇談会が開かれた。会には、この三月に本校を卒業された中から、弘前大、東北大、秋田大、明治大、青山学院大、立命館大などに進学された十二名の先輩方が出席し、それぞれの経験をもとに、丁寧なアドバイスを述べられた。

全体的に、参考書や問題集を活用して勉強したという先輩が多い中で、まず、一冊を最後までやり通すことが挙げられた。中には受験問題と似ているものもあり、どこがわかっていないかをチェックすれば大変力がつくが、あくまでも過信は禁物とのことである。

教科別にみていくと、まず英語は、後からでは伸びにくいので、単語や文法は早めに終わらせ、復習をしっかりやるという意見が多かった。また、「ラジオ講座を利用して単語の発音・アクセントを覚えると良い」「学校側で選んだ問題集をしっかりやれば、七割は確実」といった声も。社会科については、いずれも教科書をよく読み、さらに書き込んでしっかりと意味をつかむことが挙げられた。数学・理科分野は、英語と同じく、学校側から配布された問題集を重点的にやることが大切なようである。古文や漢文では、勉強をすればそれなりの高得点がとれるので、諦めずに努力して欲しいということであった。

また、「勉強しようとしても気分が乗らない時はどうすれば良いか」との質問に、「無理しないで頭を休める」と「今出来ることは、今やる。自分の力を過信し、未来をあてにしてはいけない」という二つの対照的な意見が出され、個々によるやり方の違いを感じさせた。

最後に、現役生に特に言っておきたいこととして、「自分で切りひらくという意気込みを持つことが大切」「地道な努力は苦しいが、終わった後、大変な充実感があるので頑張って欲しい」などが出され、三年部主任の五十嵐（研）先生から卒業生にお礼のあいさつが述べられて、閉会となった。

交通講話 マナーの徹底を

九月九日（水）、本校体育館において、講師に能代警察署交通指導係長の佐藤正彦氏を招き、全校生徒を対象とした交通講話が行われた。

その中で佐藤氏は、自転車に乗っていた一高校生と歩行中の老人がぶつかり、その老人が死亡してしまった事故と、クラブの最中に自転車に乗っていて転倒し、重傷を負った能代農業高校の生徒の話を取り上げ、「両者とも自分の不注意が災いして起きた事故で、もう少し注意深くしていたら起きずにすんだであろう。事故を起こした結果、被害者の損害賠償のため一生苦しまなければならなくなり、転倒した生徒は、死は免れたものの、いまだに入院生活を送っている。」と語られ、自転車事故のおそろしさを強調された。

また、能代市民の交通マナーの悪さを指摘し、特に自転車の乗り方について、「能代市であたりまえだと思われている乗り方、例えば傘さし運転や二人乗り、道路の斜め横断などを、本当のあたりまえの行為だと思ってはいけない。」と語られ、さらにそのような行為は違法でもあると述べ、もっと交通マナーを守るよう心掛けて欲しいと呼びかけておられた。

本校では、ほとんどの生徒が自転車通学であるため、今回の自転車の交通ルールを中心とした講話は、現実性の濃いもので、交通安全に対する姿勢の甘さを実感させられたらしく、生徒達の聞く態度も真剣そのものであった。

また、先日交通安全指導の一環として全校生徒の自転車点検も実施され、その結果、検査台数九百十三台のうち、約半数の四百六台が欠陥車であることがわかった。また、二年三年になるにつれ、欠陥車台数が増加する傾向があることも明らかになった。

欠陥車の中には、ブレーキの故障やすりへったタイヤの使用などのそのまま交通事故につながりかねない危険なものもかなり見られた。また、盗難の可能性が大きい錠の不備なものも数台あった。このような結果に、担当の藤本真子先生は、「一般常識として、他人に言われる前に修理するよう心掛けてほしい。」と語られた。

体験発表会開かれる

去る九月十八日（木）、校内感動体験発表会が行われた。これは「心の教育」の一環として、県教育委員会が全県の小中高校生を対象に「心にふれる感動体験」として募集したものに基づいて行われたもので、当日の発表者は次の通りである。

二E　柴田美紀子「理解してもらうということ」
二F　児玉糸子「温かい言葉」
三A　小沢澄人「走り終えて」

尚審査の結果、今年初めて十里強歩に挑んだその心境や、関門や途中の道での心のふれあいを中心とした小沢君が、九月二十五日に市文化会館で行われた発表会への本校代表となった。

さわやかに語る

生の英語にふれる

INC二外人を招く

去る八月三十日（土）インターナショナルクラブ（INC）が二人のアメリカ人を本校に招いた。この二人は宣教師として大館に来日している十九歳のローガンさんと、マット・ディロンに似てる！と定評のあった二十一歳のギャリーさんである。INCでは海外文通を通じて〝書く〟ことはさかんに行われているが、二人を招き、〝話す〟ことによって更に生の英語にふれる機会を設けようという試みであった。当日は約四十名の生徒が集まったが「日本語は絶対使わない」という約束で自己紹介はもちろん英語。また、簡単な英語のジェスチャーを教わったり、色々な一問一答の形式で会話が交わされた。ひょうきんギャリーさんによると、日本人高校生は「真面目・よく勉強する」のだそうだ。また、日本語を勉強中、ニンゲンをニンジンと言ってしまった失敗談を話してくれ、笑いの渦にまきこまれた二時間半だった。

おふたりを囲んで

銅賞に終わる

吹奏楽県コンクール

九月十四日（日）、秋田県吹奏楽コンクールが秋田県民会館において開かれ、本校はAクラスに出場し、惜しくも銅賞に終わった。

この大会に先立って行われた県北大会では金賞を受賞し、自信と勢いをつけての県大会出場であった。両大会での演奏曲目は、課題曲には、細かいニュアンスが必要とされる、「吹奏楽のための変容」、そして自由曲には、ずっしりしたムードが印象的な、歌劇「ボリスゴドノフ」より「戴冠の場」の二曲であった。

顧問の中田先生は、「県北大会では、満足のいく演奏ができたが、県大会では、演奏順で金賞候補校に挟まれたこともあり、緊張して持ち味を出せずに無念の結果となってしまった。今後、部員一人一人が基礎的な点を確実にマスターし、いつでも演奏に自信を持てるようにしていくことが課題として残りそうだ。」と語られた。

三角点

▼死者約二万人、負傷者三万人、被災者十万余。昨年九月十九日、メキシコを襲ったマグニチュード八・一の大地震はまだ、記憶に新しいが、一年以上たった今、どのような状況にあるかご存知の人はいるだろうか。▼最大の被害を受けたメキシコ市では、死者は二万人近く、被害を受けた住宅は約一万三千戸。政府は「地震復興委員会」を設置し、四万三千戸の住宅建設計画を立てたが、これまで完成したアパートはようやく千三百戸。来年二月までに、被災者全員が恒久的な住宅に落ち着くことになっている計画とは、裏腹の数字である。▼依然として約三万の人々が、路上でのテント生活などの仮住まいを強いられている。人々は政府の住宅建設計画が順調に進むことを願ってはいるが、アパートに入れば入ったで、家賃やローンの負担が待ち構えている。勤め先の建物が崩壊する危険があるからと、職場を去らざるを得なかった人も多い。失業率四十パーセントとも言われる不況、それに石油価格落下で、メキシコは「今世紀最大の危機」を迎えているのである。▼肌や髪の色・顔立ちの違い、あるいは海を隔てた向こうという、地理的な遠さだけで、私達は別個の世界のような扱いをしがちである。実際に自分の目、耳、手で感じる事がないだけに、どうしても身近なものとしては考えられないのだ。▼しかし、決して忘れてはいけない。私達が平和に暮らしている今、この同じ瞬間に、どこかで苦しんでいる人々がいる。▼私達はそれを知りながら実際の問題として考えたことがあるだろうか。自分の興味のある事だけでなく、知らない事だからこそ、もっとアンテナの幅を広げ、知ろうとしなければならない。そして、知った事をきちんと把握して行動しなければならない。自分の周囲だけが世界のすべてではないのだということを私達はもっとよく理解すべきである。